年次大会　講演要旨（令和元年十一月十五日）

小学校一年生、「困った質問」と向き合い続けて
―文学教育を拓く、今日の「国語科」の課題―

須貝　千里

■小学校一年生、「三日月」めぐる「困った質問」

（1）「三日月」の観察の宿題のモヤモヤ（地上の「観察者」の側から描いた三日月（☽）と天空の「月」自体の側から描いた三日月（☾）における「左」「右」の逆転。この事態に直面し、三日月をどう描いたらいいのかわからなくなっちゃったのは、須貝の体験）。

■文学教育を拓く、「ナンダ、コレ？！」の坩堝の中で

（1）交流と断絶、衝突。「鏡のはなし」（朝永振一郎）の「鏡の外」と「鏡の中」の「右」と「左」の逆転はなぜ、しかし、なぜ、「上」「下」は逆転しないのか。「ケロちゃん危機一髪」（佐藤雅彦）の二つの「危機」は、なぜ、をめぐる「危機」だった。

（2）三島由紀夫「美神」における「アフロディテ」の「三センチ」の裏切りのこと、村上春樹「鏡」における「鏡の中の僕」の「鏡の外の僕」に対する憎しみのこと。

（3）「ナンダ、コレ？！」の坩堝の中で、「困った質問」に「言語以前・了解不能　第三項の領域」という事態を見出し、〈対象人物〉からの折り返し、〈機能としての語り手〉問題を問うていくと、〈物語〉と〈小説〉の教材価値の違いという課題の現れ。

（4）「言葉による見方・考え方」が提起する「問い直して」を、「問い直して」を「問い直して」というように掴み直す。「次期学習指導要領」の足踏みとその克服のために。

■「予測困難な時代」／「言葉による見方・考え方」の再定義によって照らし出される、今日の「国語科」の課題（「特別の教科　道徳」の課題も）

（1）「かぼちゃのつる」：「かぼちゃ」がかわいそう？」という「困った質問」の排除。作品自体が「困った質問」を排除している。こうした事態の横行が「特別の教科　道徳」の問題点である。「考え、議論する道徳」（文部科学省の提起）に反している。今日、「特別の教科　道徳」における「文学教育の挑戦」といかに対峙するのかが問われている。「問い直して」が「徳目」に収斂してしまう事態の克服が課題となる。

（2）「ごんぎつね」：「「狐」が日本語で話していておかしい？」という「困った質問」の看過。作品は「困った質問」に応えている。このことを排除する授業は「兵十」の発見と鎮魂の〈物語〉を排除する。この事態が、克服の課題。今日、「国語科」における「文学教育の排除」といかに対峙するのかが問われている。これは「問い直して」の課題となる。

（3）「少年の日の思い出」：「なぜ、前書きがあるの？」という「困った質問」の排除。作品は「困った質問」に応えている。このことを排除する授業は「僕」を「闇」の中に閉じ込め

続け、〈小説〉を排除する。この事態が、克服の課題。今日、「国語科」における「文学教育の排除」といかに対峙するのかが問われている。これは「問い直して」を「問い直して」の課題となる。

（4）第三項理論と今日の「国語科」の課題：「ごんぎつね」における〈物語〉の現れと「少年の日の思い出」における〈小説〉の現れは、「問い直して」と「問い直して」を「問い直して」という課題に応えている。これが「予測困難な時代」／「言葉による見方・考え方」の再定義によって照らし出される課題である。

■〈言語以前〉によって〈言語以後〉を囲い込み、〈言語以後〉を世界の複数性によって問い直し続けること

（1）「予測困難な時代」は、世界観認識としての、了解不能の《他者》が課題の焦点

付記：田中実・須貝千里・難波博孝編『第三項理論が拓く文学研究／文学教育』（二〇一八年刊）を参照のこと。

（すがい・せんり、山梨大学名誉教授）

年次大会　発表要旨（令和元年十一月十五日）

妹の鎮魂から少年の死へ―野坂昭如「火垂るの墓」の作品末改変をめぐって――

徳永　淳

野坂昭如「火垂るの墓」は、昭和四十二（一九六七）年十月、『オール讀物』に掲載された初出と、昭和四十三（一九六八）年三月、『アメリカひじき　火垂るの墓』として文藝春秋より刊行された初刊とで本文末尾に異同（削除と加筆）が認められる。

これまで「火垂るの墓」は、兄妹が助け合って生きようとするも叶わず、その幼い命が喪われることで読む者の涙を誘うことから、反戦を訴える作品として一般的に受容されてきた。

一方、文学研究の分野では、作者の戦争体験を基に、亡くなった実妹への鎮魂と贖罪が主題であると捉えられてきた。しかし、本作末尾の加除を考慮したとき、そのような評価は、転換を迫られる。

鈴木琢二氏は、直木賞受賞時の海音寺潮五郎の批判を受けてこの改変が為されたと述べている（『新潮45』二〇一六年二月）。

本稿では、作品末尾にみられる加除に注目することで反戦文学として読まれてきた「火垂るの墓」について、実妹への鎮魂と贖罪を超えた新たな読みを提示しようと思う。

（とくなが・あつし、創価大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程）